

市長の ふれあい訪問



「洋画家・亀井政子さん」

洋画を描き始めて約40年になり、現在、川口市美術展の実行委員や審査員、川口市美術家協会運営委員などを務め、自宅で絵画教室も開いている洋画家・亀井政子さんを岡村市長が訪問。絵を描き始めたきっかけなどをお聞きしました。

市長 みなさんこんにちは。早いものでいよいよ4月を迎えました。平成20年度の始まりです。今年度も市長のふれあい訪問、しっかりとがんばってやっていきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願います。

さて、今月の市長のふれあい訪問は、洋画家の亀井政子さんです。よろしくお願いたします。亀井さんが絵を描き始めたのはいつからですか。

亀井 東京の王子に住んでいた時、上野の西洋美術館が完成し、ミロのヴィーナスが来たんです。それを観て感動して、こういう思いを物に出来たらと思っていました。そして昭和41年に川口に引っ越して来た時に、たまたま独立美術協会の絵の先生が近くに住んでおられましたので、習い始めました。

市長「生きている証として絵を描きたい」とおっしゃっていますが。

亀井 ただ家庭にいて何にもしないのはつまらないと思っていました。自分の支えが欲しかったんですね。

市長 支えがあるというのはいいことですね。40年近く絵を描いてると、絵に対する思いとか何を表現したいのかという思いは変化してきたと思いますが、振り返ってみてどうですか。

亀井 最初の頃は台所のネギやサツマイモ、ダイコンなどを描いたりしてたんです。絵にするのと物のありがたさが分かりますね。その後、先生の影響で今のような抽象画を描くようになりました。

市長 普段目立たない物でも絵にすると、命が蘇るという感じがしますね。

亀井 もったいないような物が捨ててあるんですね。それを自分の絵の中に入れてみるとその肌が綺麗になるんです。金属の腐った物でもその肌が綺麗になるんですね。それを色で表現すると「やったあ」という気持ちになります。

市長 その「やったあ」という満足感という達成感が得られるまでにどの位かかりましたか。

亀井 20年かかりました。20年前までは花とか綺麗な物ばかり描いていましたが、くずを集めて描いたところ、たまたま県展で賞をいただいたので、そういう物が愛おしくなって見直すようになったんです。

市長 今年の2月でしたか、市内のギャラリーで個展を開催されて、その時のテーマが「手わざと文明」ですが、どういう発想なんですか。

亀井 実は、その個展のテーマは「手仕事」だったんですが、もつと素敵なネーミングはないかとギャラリーの方に相談したところ「手わざ」にすればとアドバイスをいただき、そのようになりました。

市長 亀井さんは市展の実行委員もされていますよね。ずっと審査してきて何か感ずることはありますか。

亀井 レベルが上がってきました。若い方から熟年の方まで応募が増えました。

市長 そうですか、若い方にどんどん描いてもらいたいですね。亀井さんご自身もこのアトリエで生徒さん



に教えていますよね。

亀井 月3回で火曜日と木曜日です。生徒は15人位です。若い人もいますが、熟年の方が多いですね。

市長 やっぱり熟年の方のほうが時間が有るんですかね。それと今までの自分の生き方から何かやってみたいという思いがあるんじゃないかな。

亀井 はい、それが一番だと思います。みなさんの何かやりたいと思う気持ちが、ひしひしと伝わってきます。

市長 お辞めになる方はいませんか。

亀井 いませんね、みんな長いお付き合いです。

市長 それは亀井さんのお人柄と教え方がよろしいからですね(笑)。アトリエが完成したり、去年、二人のクロードル展を開催したり、最近の川口の文化的なことをどう思われますか。

亀井 まず、何と言っても、レベルが高くなりましたね。展示する箱物が出来て、公民館で市展を開催していた時より応募が増えたと思います。

市長 そういう意味でもやはり美術施設は大事なんですよ。これからお元気で若い方を引っ張って行ってください。今日はどうもありがとうございました。